

## 韻鏡管見

龜田次郎

今回、本館で韻鏡諸本展觀會が開催されるについて、自分の所藏本の提出を促されて出陳しましたが、更に、此「韻鏡」といふものについて、極めて平易に、所謂今日の流行語でいへば、大衆向に講演せよとの事でありました。それで、今日、此席で、其希望方針の下に、お話する次第であります。此所にお出でになつて居られる方々の中には、已に御自身で、専門的知識を有たれて居る方もおありでありませうが、何分當事者の御意嚮が斯様な譯ですから、不充分で物足らぬ所があるでせうが、それは御容捨を願はねばならぬとおもふのであります。

「韻鏡」といふ書物は、夙に其出來た支那では逸書に屬して傳はつてゐないので、獨、我日本に遺存してゐるのです。而も古來、難解の書とせられて、學者が研究に大に苦しんで、韻鏡十三年、八衢八年といふ語さへある位でした。本居春庭の「詞の八衢」<sup>オチアタタ</sup>は、今日では中等學校の教科書には「八衢」の内容の動詞の活用を、極めて簡明に記述してあるので、數時間で教授が明瞭に出來る様になつてゐて、最早、八年といふ様な長い年月は要しない事となりましたが、之に反して、「韻鏡」の方は未だ中々容易に了解出來ない様であります。此は古來難解書とせられて、十三年も掛るといふ位にいはれ、果ては「韻鏡」は理論では中々了解するのに骨が折れて大に苦心を要する。「韻鏡」は到底學理ではゆかぬ、寧、頓悟のものであるとさへ唱へられてゐるのです。「韻鏡」は決して古來から唱へられてゐる様なそんな難解

の書物では無いのであつて、學者が其研究の方法を誤つて次第に世を経るにつれ、愈、益々其誤解を重ねた結果、斯様な事になつたのであります。それで自分が多年此「韻鏡」について研究致しました所から、古來研究の徑路や、研究者の迷路に這入つた點や、其他種々の事項を順序を立て、お話しして、「韻鏡」其物の實質について述べ、皆様の御參考にしたいとおもふのであります。尙、繰返して申して置きます事は、私の講演は、元來が平易通俗の方針であるから、極めて大綱の點のみを述べるので、詳細な事項に關しては、之を全然省略して避けるのであります。只「韻鏡」の本質本體は何かといふ事がわかる丈を述べるのです。それで尙進んで微細な點については、皆様が更に各自御研究になられん事を切に望んでやまないであります。

最初に申しました様に、「韻鏡」は其本國の支那では、夙に散逸して仕舞つてゐて、獨、我日本に儼存してゐたのでありますから、従前から其研究も亦彼邦には全然無く、吾邦ばかりにあつたのです。近年支那では、所謂小學の學問が勃興して來たので、此「韻鏡」の影印本や覆刻本が刊行され、従うて「韻鏡」の研究も起つて來たのです。然しこの傾向趨勢は極最近といつてよいのです。それで此「韻鏡」の研究の徑路をお話するのに、自然我日本ばかりの話になるのは致方がないのです。此事は特に御承知を願つておかねばならないのです。

「韻鏡」は支那で何時頃出來たかは詳かに知れないが、唐末であらうといはれてゐるのです。全篇四十三圖あつて、每圖二十三行(即、七音)十六段(即、四聲で每聲四段)に分けて、これに漢字を配置し、上下左右相照し合せて音韻を正し得るから、音韻の明鏡といふので、其書名が出來たのであります。此「韻鏡」は宋代に張麟之といふ人が、友人から此一篇を獲て、資益がある所から、紹興三十一年(唐亡後二百五十四年吾朝平治亂後二年)に印行し、三十七年後の慶元

三年(吾朝源賴朝薨前二年)に再刊し、更に又七年後の嘉泰三年(吾朝源實朝將軍に任命の年)に序例を撰述して添加へて三刊したといふことが、其序文に見えてゐるのです。又此「韻鏡」は、宋の初には避諱の爲に「韻鑑」と改稱されたと、此序文に見えて居るのです。宋代に出來たものなら斯る名をつけないだらうから、此點から唐代の作である事が知られるのです。此第三板本が、支那から傳來して奈良に存在してゐたのです。此三板本が後年に見出されたのです。其發見の顛末が種々の「韻鏡」關係書に見えてゐます。今拙藏の「韻鏡看按集」(室町初期成)といふ鈔本の卷首の文を引用しますと、

南都轉經院律師此韻鏡久雖所持不能讀之間上總前司公氏此序屬令點之處非悉曇師難叶終返之爰小河嫡弟明了聖人(信範上人事也)有之悉曇與義究日域無双人屬之初加點者也自爾以來切韻妙義有釋門相傳更凡儒無之因茲序云胡僧(天竺人也)有此妙義儒者未聞之矣又之凡儒不得其傳

とあるのです。然るに後年世に公にされた河野通清の「韻鑑古義標註」(享保十一年刊)上卷の最末には、

○韻鑑本朝傳來舊記云皇和人王八十九世龜山院文永之間南都轉經院律師始得韻鏡於唐本文庫焉然不辨知有甚益又同時有明了房信範能達悉曇掛錫於南京極樂院閱此書而即加和點自是韻鑑流行本邦也

とあつて、龜山天皇御宇文永年間の發見の様に記してあるが、後世の學者は皆此説を襲用してゐる様であります。處が此年代については、已に岡本保孝といふ幕末明治初年に居た韻鏡學者は、其著「韻鏡考」に疑つて「此舊記の出典考ふべし」といつてゐますが、自分も亦同感です。それは此文永年中初めて發見したといふ時より以前に、已に「韻鏡」の鈔本があるからです。それは東京帝大の國語研究室に、建長四年二月十二日書寫了明了房信範と奥書のある「韻鏡」古鈔

本があつたのです。これでもつて知られるのです。處が、此古鈔本は、惜しい事に大正十二年九月一日の震災で焼失して仕舞つたので、最早今日では見る事が出来ないのです。然し其奥書や内容の一斑は、大矢透さんの「韻鏡考」といふ名著にも載つてあつて知る事が出来ます。兎にも角にも、鎌倉中期に已に發見されてゐたのは確であります。斯く愈々「韻鏡」が發見されたけれども、前にも申しました如く、誠に難解であつたので、研究に苦んで、或は鈔本を調製したり、或は註釋を作つたりして、大に憂身を窶したのであります。今日吾々は多くの古鈔本や註釋書などの遺存してゐるのを見るのであります。古鈔本では、前述の大正震災焼失の明了房信範書寫の建長四年本を初め、玄惠法印の元徳三年正月書寫本、俊慶權律師の嘉吉元年仲春本（醍醐三寶院所藏）、元龜二年本（佐藤仁之助氏所藏）本などがあります。註釋書では至徳四年本の「指微韻鏡略抄」、同年の「韻鏡秘訣」を初めとして、應永年間に出來た「指微韻鏡私抄略」、絶海和尚作と稱せられる「韻鏡略抄」、照珍作の「反音抄」、聖清書寫の「道惠抄」、「韻鏡字相傳口授」があり、其他寶徳元年宗杲書寫の「七種反音」、文明十七年任堯書寫の「五韻反」、永正年間には印融法印の「三四反切私抄」、大永前後には「韻鏡珪玷集」があり、尙此室町時代のものに、前述の「韻鏡看拔集」もあり、以上の諸本は、皆、何れも韻鏡其物に就いての註釋でありますが、其註釋も專、韻鏡の序文について述べたものであつて、本圖について論述したものは殆んど無いのです。又此と同時に、悉曇學者が、其研究の上に「韻鏡」を利用する者も出たのであります。佛教中特に眞言宗に於ては、諷誦を重んじて、音聲即妙乘と立てたので、従つて聲明に對する關心も深甚であつた處へ、「韻鏡」といふ書物が發見されて、聲韻上の幾多の術語を供給したので、其悉曇上の講義に「韻鏡」を利用してゐるのです。前に申しました明了房信範の著述の「悉曇私抄」、「調聲要決抄」、「悉曇字記明了房記」にも、又東寺三寶の一人杲寶の「悉曇

字記創學抄」にも盛んに「韻鏡」が利用されてゐるのです。これで其一班が推測されるとおもふのであります。

斯の如く、「韻鏡」の鈔本や、註釋書や、また悉曇學に利用などが起つて來て、鎌倉室町時代に及んだのであります。所が自然の傾向として、茲に「韻鏡」の刊行が出來たのです。それは室町時代末期の享祿元年、當時海外貿易の要港であつた和泉國堺港で創刊されたのです。「韻鏡」發見後二百五十六年後であります。此創刊は、其跋文に、

韻鏡之書行於本邦久而未有刊者故轉寫之訛烏而焉々而馬覽者多困彼此不一泉南宗仲論師偶訂諸本善不善者且從且改困命工鏤板期其歸一以便於覽者且曰非敢擴之天下聊備家訓而已於戲今日家書乃天下書也學者思旃

享祿戊子孟冬初一日

正三位行侍從臣清原宣賢

とあります。これで以て其刊行の由來や顛末が明かるのであります。此跋文中の泉南宗仲論師を、普通には「泉南の宗仲論師」と讀んだが、或學者は「宗仲と云ふ人が有るのでは無い、和泉大鳥郡に南宗寺といふ寺があるが、其頃は寺ではなく庵主であつて、其庵主に仲論師といふのが有つたのだ」といふ説を唱へ、此に従うてゐた人もあつたが、近年、堺市の光明院といふ寺中の普門院に宗仲といふ僧侶が居つて、三條西實隆郷が此人に宛て、新板の「韻鏡」一本を懇望された文書が發見されたので、南宗と續けてはならず、宗仲は切つてはならぬ事と定まつた。此普門院の事は、夙に知れてゐて、寶曆七年に出來た「全界詳志」にも、

往年光明院の枝院の普門院主韻鑑年代記の二書印板せし由、其頃西三條實隆卿より來書に其事あり。何れの本なりや未詳云々。

とあるのを、黒川春村の「音韻考證」にも引用してゐるのであります。さて此創刊本の享祿元年板「韻鏡」は自分の知る所では、東京帝大國語研究室と故木村正辭博士とに各一本を藏せられてゐたのだが、研究室本は大正十二年の震災で焼失し、木村本は何處に傳はつたか不明であります。此二本の外に、此享祿板と唱へられるものが所々にあるが、自分の見た所では、何れも後出の寛永十八年板の覆刻本の卷末の刊記を削去したものであります。即寛永十八年板の而も其後刊本といふべきもので、現在では此創刊本は未だ見出され無いのであります。此創刊本は、後三十七年目永祿七年に再刊されたが、多少本文に異同がある様であります。此再刊本は往々世間に遺つてゐますし、又支那の「古逸叢書」の中に收められて出版されてゐます。拙藏本は船橋家即清原家の舊藏本で、「古逸叢書本」や民國十八年の謄寫版本と共に展觀に供へてあります。此再刊本は跋文の次に、

頃間求得宋慶元丁巳張氏所刊之的本而重校正焉永祿第七歲舍甲子王春壬子

と陰刻してありますから、創刊本との異同ある事が知れるのです。尙詳細に異同を知るには享祿板の覆刻寛永十八年本と永祿板の覆刻「古逸叢書」本とを相互對照されたならば明かるのであります。「韻鏡」を室町時代の末期に享祿、永祿の二板が刊行されてから、江戸時代に及んで續々と出版を重ねられてゐるのであります。即徳川時代になつてから、慶長十三年二月に京都で木活字板が刊行され、次いで元和頃の刊行とおもはれる整板本二種一は序文有割本、一は其無割本の何れも大型本が出版になり、引續いて寛永五年、同十八年、同二十一年、正保二年、同三年、同四年、慶安元年に二種、明暦二年、萬治三年、寛文二年、同三年、同四年、同十一年、延寶三年、同七年、天和二年、貞享二年、同四年、元祿六年、同九年、同十年、同十二年、同十四年、享保元年、と續々大型本や袖珍本が現はれ、尙此以後に

も表題を改めて諸種の「韻鏡」が刊行されて近く明治末年迄に四十有餘部も世に出されてゐます。従つて其内容も多少改められてゐるのです。只以上の中で寛永十八年本丈は、創刊本の儘であつて、他の諸本は皆悉く多少の改竄を施してあるのです。又一方其註釋書も、同様に續々と世に現はれて來たのであります。江戸時代に出た斯様のものゝ最初は菅玄同(鎌田得庵)の「韻學秘典」正續五卷であります。本書は未刊であつて其寫本が今は内閣文庫に藏せられてゐるのです。慶長十一年藤原惺窩が木下長嘯子を訪ねて談、會、九弄反紐法に及んだが、此時、惺窩は紀州和歌山へ行く期日が迫つてゐたので、「九弄圖解」を作つて、長嘯子に示した。其草稿に依つて、門下の玄同が書寫した旨の奥書が有ります。而して「九弄圖解」は、本書の續集であります。正編四卷は玄同が元和七年の撰といふ事です。四卷の一は、假名反切秘傳、二は名乗反切秘傳、三は諸例秘釋、四は調韻要訣を收めて、夫々説明をして居るが、「韻鏡」の本圖には、毫も觸れずに、何時も深秘に至りては、須らく口授身授を受くべく、筆墨の能く盡す所に非ずと逃れて居るのです。他の諸點は姑く之を措くも、「韻鏡」を人名反切、名乗判斷を説いてゐるのが、本書が最初で、正編第二卷に見えてゐるのです。これが特に注意すべき所で、「韻鏡」の本旨を誤つて後世に大影響を與へて、今日まで其弊風を傳へてゐる所であります。此書に次いで矢張、京都の住譽といふ人が、寛永三年「韻鏡切要鈔」を著しました。此書は「韻鏡」の序例の解釋で、圖には毫も觸れてゐないのです。然るに翌寛永四年に、同じ京都の自等庵宥朔といふ僧賢が、「韻鏡開卷」六卷を著して、「韻鏡」全部に互つて註釋をしましたが、此書中に「人名の反切には音和を取るを正と爲す」とか、「五行の相生を取る事肝要なり」とかいつて、また人名反切名乗判斷を主張しました。此説は前述の「韻學秘典」所説の「謹考韻鑑歸字例」の如き程のものでも無いのですが、「韻學秘典」が寫本の儘で、世に廣く流布しなかつた爲に、

此「韻鏡開鑑」の方は刊行でもあり、世上に弘布して、後、正保四年、萬治二年と再度迄も重刊されて廣がつた爲めに、後世罪魁とされて非難を受けるので、後年僧文雄の名著「磨光韻鏡餘論」(文化四年刊)にも、

或は人名反切の贅辯を費すなど蕪穢見るに堪へず。其の説を詳にするに、開鑑實に之が祖たり。

と大攻撃を蒙つてゐるのです。尤も反切に依つて字義までも得られ又三十六字母の三十六を四九の積とするといつてゐるのは、前述の「韻鏡切要鈔」にも説いた所であるが、更に一步を進めて、木火金水の五行説にまで説及してゐるなどは、一方からいへば多大の苦心をした所であらうが、此開鑑の示した一路は、爾後一百年間も後の學者の研究を邪道に陥らしめ迷路に彷徨せしめたのみならず、尙延いては、今日までも、此弊風が世に行はれて、「韻鏡」の反切を以て人名反切名乗撰定判斷に使用されるに至つたのです。「韻鏡」の本旨を誤解曲説した源泉は、此開鑑の所説である事を忘れてはならぬのであります。實に慨歎の極であります。

元和偃武以後文藝復古學術の研究頗に旺盛を來し、元祿時代に及んでは、學界の各方面に互つて大に觀るに足るものが頻出したのであります。「韻鏡」の研究も、亦此盛運に連れ、續々世に現はれて來たのは、當然の事であります。此代表的の人は、僧盛典であります。此人は元祿四年「韻鏡易解」、同十二年「韻鏡字子列位」、正徳四年「新增韻鏡易解大全」、享保十五年「九弄和解」、同十七年「印判秘訣集」、元文二年「倭語連聲集」等を著しました。非常に長命の人であつたので、數多の著述を公にした様です。此外に、此時代の前後に澤山の「韻鏡」關係の著書が頻出してゐるので、前述の「韻鏡」本文の覆刻や重刊や改刻は勿論、註釋書類も亦續々と多數刊行されたのであります。其主要なものを摘出しますと、以前には承應三年には「道惠鈔」を刊行した「指微韻鏡抄」を初めとして、萬治三年には「韻鏡遮中抄」



(頭書韻鏡、頭韻鏡)といふ「韻鏡」全部に互つて註釋した最初のものが出てゐます。此書は、後、寛文三年、貞享四年に重刊されて廣く世に流布した様です。此外寛文三年「韻鏡集解初抄」、同八年「韻鏡集解切抄」、同九年井上秋齋の「韻鏡見妖解」、同年小龜益高の「韻鏡秘事抄」、同年太田嘉方の「韻鏡指南鈔」、同十年牧野重長の「韻鏡頓悟集」、同年小龜益高の「韻鏡診解」、同十一年同人の「韻鏡九弄極秘傳指南」、同十三年僧周海の「韻鏡指要」、貞享二年毛利貞齋の「韻鏡秘訣袖中鈔」、同年「韻鏡求源抄」、同三年不孤齋有必の「韻鏡削補便蒙抄」、同四年湯淺重慶の「韻鏡問答抄及合類韻鏡」などがあり、同時代には元祿十二年岡玉摩の「歸元韻鏡」、同十三年萍風子の「韻鏡詳說大全」、同十五年「韻鏡詳解評林」、同十六年「韻鏡清濁辨音鈔」、寶永年間「韻鏡奧理秘事諸相傳頓悟集」、同二年馬場信武の「韻鏡諸抄大成」、正徳五年毛利貞齋の「韻鏡袖中秘傳抄」、同年辻度昭の「反切例」、享保年間河合元の「韻鏡調」、同五年岡島道高の「韻鏡井蛙抄」、同七年僧尊慧の「韻鏡圖解及同綱目」、などがあります。尙此以後にも澤山刊行されてゐます。又此等刊行の外に尙未刊で寫本の儘で世に傳はつてゐるものも非常に多數ありますが、大體極主要のもので刊行本ばかりを申しましたので此丈で見ましても實に隆盛を極めたものです。

前にも申しましたが、菅玄同の「韻學秘典」や自等庵宥朔の「韻鏡開奩」が「韻鏡」を人名撰定に用ひ初めましてから、此風潮が後世まで風靡致しました。一體に佳良な名前をつけて、一生を祝福したいのは、人間の常情であります。最初は單に好奇心から、「韻鏡」に精通した人に自分の名乗や名前の撰定を懇請したのであつたでせうが、之が流行を極めてからは、遂にこれを職業とする専門の撰定家を生ずる様になつたのであります。現に今日でも、斯様な所が成立つてゐて、講義する塾さへある相である。處が斯る「韻鏡」の本義本旨を誤解曲説する弊風は、早晚排斥矯正されねば

ならぬ譯である。然し「韻學秘典」や「韻鏡開鑑」の所説は約一百年の間世に行はれて、兩書以後の「韻鏡」關係の諸本には、大抵此曲説は「韻鏡」の一つの奥義として説述されてゐるのであります。前に述べました多數の註釋書には、大概述べてあるのです。茲に一百年後の享保十一年に、和泉堺浦の沙門叡龍（河野通清漣窩）が、「韻鏡古義標註」元文三年「同補遺」を出板して、茲に従來の曲説を排斥して、世の學者の迷夢を覺醒せしめたのであります。叡龍は本書の序文の中に、

又特有爲通韻鑑者專一反切道俗之名而猥說歸納之是非剩苦三字之少等都違本旨嗚呼此學弊風甚日回復哉

と述べて、「韻鏡」を名乗反切に用ふる過去一世紀の曲説の迷雲を排して、讀書の正音を明すの尊燈たる事を絶叫したのであります。「韻鏡」の創刊も、此覺醒の名著も、共に同じ泉州の堺港の人に依て、而も同じく僧侶に依つて公にされたのは、誠に奇とすべきものでありませんか。此人名を反切して吉凶を占ふ様な事の愚論曲説なる事は、此叡龍の外に、當時の一代の鴻儒荻生徂徠も、其著「なるべし」にもいつてゐます。此は兩人の間に無關係で唱へ出されたのでせうが、東西に同時に、斯る説の出た事は、また不思議であります。さて此叡龍は、後年還俗して漣窩河野通清と改めたのです。後裔は現今堺市に在住されてゐます。此叡龍即、漣窩は、京都高倉にも存在してゐた事もあつて、而も時代も同じであるから、此書名に「古義」と題したのも、當時伊藤仁齋が京都堀川で復古學を唱へてゐたし、自分も亦我より古を作すといふ氣運に乗じて、斯る名稱をつけたのではなからうかとおもふのであります。此人には他に著述も澤山あり、本書末の廣告にも見えてゐます。又此人の「韻鏡」に關する「傳授切紙」といふ類が、多數寫本で諸所に傳

はつてゐます。寛保二年に漣窩先生口義、永田直筆受「改點韻鑑」といふのがありますし、尙、此「古義」の脈を引いたものが多數あります。即、「改點韻鑑」の外に、寛保元年僧乘運の「韻鏡翼」、寶曆十一年池田如梨正傳、田川周芳撰「韻學口訣」などの刊本を初め、前に述べた様に寫本で未刊の儘、世間に傳存してゐるのが大分あります。

漣窩河野通清の唱道によつて名乗反切の弊風が一朝にして止んだとはおもはれませんが、「韻鏡」が讀書に資益あるものだとはいふ事は、頗る信ぜられる様になつて、後僧文雄の名著「磨光韻鏡」の出るまでは、此「古義」の天下でありましたが、然し其間僅に二十年に過ぎないのであります。

「韻鏡」の研究が、段々と盛んとなつた此享保の頃から、一方には「韻鏡」に依らないで、獨立に音韻を研めるものも出て來たのであります。此風潮は特に注目すべき事で、これがまた後年の「韻鏡」研究に多大の資益影響を醸す事となつたのであります。今次に此獨立派とも稱すべき音韻研究を申し上げますと、古く慶長十二年に松尾重理が「漢吳讀音法」(寫本)を著してゐますが、これは姑く措いて、享保の頃種積以貫の「九弄十紐口訣」、同二年同人の「反切捷徑指南」、同五年僧天産の「聲音對」、寶曆十二年齋靜齋の「音例」、天明元年寺尾正長の「解經秘藏要略」、同五年同人の「解經秘藏」、安永五年富森一齋の「韻鏡藤氏傳」、文化十四年若槻敬の「音訣」、天保十三年大澤養の「韻鏡發輝」、同十五年同人の「韻鏡發輝易索」などが其主なるものであります。

又他方には元和偃武の頃から支那の小學書の翻譯が續々と行はれ、又此等小學書の箋註書も後年に澤山刊行された上に、清朝勅撰の「康熙字典」が享保年間に傳來し、安永初年に翻譯されて世に弘まり、此等の刊行が、また大に「韻鏡」は勿論、我邦に於ける支那音韻學の發達進歩に偉大な影響を寄與する所があつたのは、忘れてはならぬ事でありませぬ。

我邦「韻鏡」研究に劃期的の名著を公にしたのは、僧文雄であります。此人は延享元年に「磨光韻鏡」を刊行して、茲に我「韻鏡」學に一大時期を劃したのであります。本書の緒言の首に、

韻鏡自<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>于<sup>テ</sup>劔<sup>ニ</sup>剛<sup>氏</sup>門<sup>ニ</sup>二百有餘載<sup>于</sup>茲<sup>ニ</sup>世未<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>眞<sup>ノ</sup>面目<sup>ヲ</sup>昔者宗仲蠹魚<sup>ノ</sup>之餘出<sup>ニ</sup>乎<sup>レ</sup>臆<sup>ニ</sup>裁<sup>ニ</sup>焉爾<sup>ト</sup>來<sup>ニ</sup>諸<sup>家</sup>增<sup>ス</sup>損<sup>ス</sup>者不<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>數十本<sup>ニ</sup>要<sup>レ</sup>弗<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>開<sup>閉</sup>之有<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>愈<sup>レ</sup>訂<sup>レ</sup>愈<sup>レ</sup>悞<sup>ヲ</sup>攷<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>願<sup>ニ</sup>篇<sup>孫</sup>韻<sup>之</sup>翻<sup>切</sup>則<sup>レ</sup>率<sup>不</sup>律<sup>雖</sup>篇<sup>韻</sup>原<sup>無</sup>等<sup>第</sup>之<sup>可</sup>見<sup>校</sup>之<sup>韓</sup>韻

劉圖<sup>一</sup>則<sup>如</sup>視<sup>諸</sup>掌<sup>平</sup>遂<sup>校</sup>成<sup>一本</sup>於<sup>是</sup>可<sup>謂</sup>韻<sup>鏡</sup>復<sup>原</sup>矣

と絶叫してゐるのであります。享祿元年韻鏡創刊後二百十六年のことであります。本書は四十四年後天明七年に、再刊され、更にまた七十一年後安政四年に、三浦道齋に校正されて出版され、後世大に流布したもので、「韻鏡」といへば爾後皆本書を基準としたものであります。此人は引續いて寛延元年「古今括韻開合圖」、同三年「九弄辨」、寶曆二年「三音正譌」、同四年「經史莊嶽音」、「字彙莊嶽音」、「和字大觀抄」、安永二年「韻鏡指要錄」、「翻切伐柯篇」、同九年「正字韻鏡」、「韻鏡字庫（以上四書を後篇といふ）」文化四年「磨光韻鏡餘論（後篇及本書及後刊行）」などの著述があります。其最偉大なる卓見の第一は、後篇「指要錄」の卷首韻鏡大旨の最初に、

韻鏡の書は本反切の圖には非ず、文字の音韻を正すの鏡なり。

と唱破絶叫したのであります。次に第二の卓見は、「韻鏡」それ自體に於て求むる所の音を與へるのであるから、「韻鏡」は切韻の圖では無いと斷じ、從來張氏序例を解説するに汲々としてゐたのを排して、張氏自身も「韻鏡」の本旨を誤解したのであると看破した點で、文雄自身は之を證據立てる爲に、「切韻指掌圖」や「切韻指南」には現に切韻の二字が冠らされて居るが、「韻鏡」には其様の名稱が無いと述べて居ます。第三の卓見は、文雄は「韻鏡」に依つて

當時種々に傳へられた支那音の正否を判定する標準とした事であります。此外に尙多くの卓見もありますが、一々述べないで、只其極主要なもの丈を述べておきます。然し又一方には、多少の缺點もあるのです。即慢に音圖の文字を増加したり、勝手に開合を變改したりしてゐる所などは、全く無暴な遣方であるとおもふのです。それで後世の學者が之を非難攻撃するのです。縱、多少の缺陷があるにしても、此「磨光韻鏡」は前、後、餘の三篇は勿論、他の諸著も皆何れも一大名著たるを失はぬのであります。後世の「韻鏡」諸本は、皆範を此書に採つたといつてよい位です。今其主要な系統のものをいへば、本圖丈では寶曆頃の「卷懷韻鏡」があり、全篇のものでは寶曆七年僧了圓義の「韻學發蒙」、天明元年僧龍音の「韻鏡經緯」、寛政六年近藤篤の「韻學筌蹄」、天保五年三浦道齋の「韻學楷梯」等の刊本があり、寫本では多數の諸本があります。鶴峰戌申の韻鏡關係書も皆此系統で、奥書には韻學僧京師三條了蓮寺無相文雄上人第七傳兼本居學鶴峰戌申などと記したのがあります。又他方反對の側のものでは、寛政十一年泰山霧隱の「音韻斷」の刊本の外に寫本類で大分あります。殊に幕末の黒川春村門人白井寛蔭は、其師春村の「音韻考證」附説の「韻鏡考補」に、

文雄黠才に伐り、慢に音圖の文字を増加し、韻鏡は貫通の律を以て漢吳兩音の規則を正す書なる事を辨へず、常呼に泥み、漢、吳、直、拗、古音、轉音、略音等を混淆し、音註を施したれば、貫通の律なきが如し。猶後篇等十餘卷あり。凡て誣説の甚しきものなり。

と痛罵してゐますが、此は其長所を没して短所のみを攻撃したのでせうとおもはれるのです。文雄の話は大略以上の通でありますが、斯る大家が突然に出現した様におもはれるでせうが、決してそんな譯では無いのです。物事には原因と結果とがあるもので、決して突飛に現出するものではありません。文雄の如き大家の出現にも所謂因果關係とも

いふべき事情状況があつたのであります。今其事をお話しておかうとおもひます。

前にも申しました様に、支那から續々と小學書が渡來し、又我邦では其等の書籍の翻譯が隆んに行はれ、其等の書物の箋註も澤山出來ました。加之、學術の研究が勃興旺盛となり、學者殊に支那學即漢學の方面の人々が、自然の成行として、支那の音韻を研鑽する様になつたのです。此文雄の時代には、特に此支那音韻研究が大に行はれて居た世でしたのです。今其大略をお話し致しませう。

一世の鴻儒荻生徂徠は、此時代に於て天下に覇を有つてゐて、其勢力は大變なものであつたのです。此天下の鴻儒徂徠は、自分の塾で、支那語の研究を初め、正徳元年十月に譯社を設け、當時の有名な支那語學者岡島冠山を聘して講習會を開いた。此譯社約といふ規約が、「徂徠文集」六にも見えてゐます。徂徠は、此時多少學習したでせうが、餘り支那語は出來無かつた様で其事は「授業編」にも見えてゐます。其著述に「韻概」、「同別記」があつて、寫本で傳はつてをり、尙支那語の外に、滿文も研究した様で、「滿文考」といふ著書もあります。これは寫本で神宮文庫にも所藏されてゐるのです。此徂徠門に、太宰春臺が居て、當時在塾中で此支那語の講習を受けた。一人で、同門には矢張冠山に學んで音韻及唐音に通じた木下蘭泉があります。「磨光韻鏡」の著者僧文雄は太宰春臺の門に入り、支那語即唐音を習つたのであります。文雄と同門に關口黃山といふ唐音の象胥家(譯官)があります。斯様な關係からして、文雄の支那音韻の素養が出來て、後日種々の名著書を撰述する事が出來たのであります。これで文雄の學問の淵源來由がわかるとおもひます。

徂徠が東方江戸で覇を唱へてゐたに對立して、西方京都で勢力を張つてゐた伊藤仁齋の古義堂の塾でも、「音韻學」

の研究は行はれたのであります。東都徂徠の社中で、支那語の學習があつたに對して、仁齋の塾では、朝鮮語の研究があつたのであります。仁齋の長子東涯には、其小學書の著述の外に、朝鮮語の研究もあつて「韓語考」の著もあつて、今日寫本で傳はつてゐます。徂徠の「滿文考」と相對して面白い現象だとおもふのです。徂徠派の流を汲んだ僧文雄が、其名著「磨光韻鏡」や「三音正譌」に、漢吳唐三音を以て説明してゐるが、此唐音は杭州音だといふ。又此人は朝鮮語も知つてゐたといふにも拘らず、毫も此朝鮮語を著述の中に入れてゐないのは何故であるか、不思議でならないのであります。或は當時學閥の關係からか、或は同じ京都在住で程近い所に居つたので、此等の事情からであらうか、此點は深く調べて見たいとおもふのです。

徂徠や東涯や春臺の外に、後年には漢學者に小學書の著作が多く出たが、直接音韻方面のもので、主要有名なものを二三挙げますと、皆川淇園の「補正韻鑑」(寫本)、中井履軒の「諧韻珊瑚」(履軒古韻「崇文叢書所收」、山梨稻川の「文緯」、「諧聲圖」、「古聲譜」、「諧聲律呂三類」、「考聲徵」などであります。此等を以ても漢學者は、皆支那音韻に關心を有つてゐた事が推し測られるとおもふのであります。

文雄の頃までは、「韻鏡」の研究は、縦、誤解や曲説を下して迷路に這入などしたとはいへ、其研究は「韻鏡」其自體のもので、研究者も、僧侶か或は漢學者かであつて、他の方面の者は無かつたのであります。處が此文雄と時を同じうした我國學四大人の一人である本居宣長が出で來つて、茲に「韻鏡」は勿論であります。他の支那音韻の學書をも利用し、應用して、我邦の古典を研究する様になつたのです。此純粹の國語學者の探究に依て、大に我古典を闡明たらしめた事は、我學術界の一大轉機ともいふべきものであります。此は忘れてはならぬ事柄であります。一たび此國

學大人の方針方法が、爾後學界に波及して、愈、益貢獻寄與をなした事實は感銘すべきことであります。本居宣長には、安永四年「字音假字用格」、天明四年「漢字三音考」、寛政十二年「地名字音轉用例」等の直接支那字音關係の著述がある外に、其大著「古事記傳」、其他の著書の所論には皆支那字音の學說を以て證明した名論高説が充實してゐるのであります。一々茲に縷述するに及ばぬ事であり、又此本居宣長の學說は、後年東條義門とか、關政方とかいふ人達に依て補訂され、愈、完成せられて、學界に裨益を興へてゐるのであります。此等の事柄は、國語學に關するもので直接「韻鏡」に關係した事でないから、これ亦省略致します。

前に述べました様に、僧文雄に依つて「韻鏡」の本旨本質が明かになりましたが、此人に依つてもまだ到らぬ未知の點が存在してゐたのであります。それを明かにしたのが、太田全齋であります。此人は實に「韻鏡」學の大家であつて文化年間に名高い「漢吳音圖」や其他の好著を公にしました。支那音韻學書としては屈指有數のものであります。「漢吳音圖」以外の著述は未刊であつたのですが、去る大正四年に全部が活版本となつて出版されました。「漢吳音圖」は「韻鏡」に本づいて、漢吳音を示したのですが、元來此「韻鏡」には反切門法など煩瑣な説明が附纏うて居たのを、文雄「磨光韻鏡」に於ては、張麟之の序例を全部削去つて、「韻鏡」は本圖其儘で音を得るものである。反切に藉るを要しないと喝破しましたが、それでも、尙、索隱では門法を説いてゐるのです。それを此全齋といふ人が、初めて門法を棄て、圖について音を知るものとしたのが大卓見であります。次に全齋は、音圖の同行同段は共通の音韻を有すべきものと考へたが、我邦に行はれてゐる字音は、同行同段でも、中々共通の部分をも有しないから、従前此處まで看破した者は絶無であつたのです。全齋は我邦の字音で一様でない音について共通なのを認めるには、一字に先づ數



多の音があることとして、原音、次音、轉音、省呼、俗音、便習音、訛音などといふ種類を立て、其中の常に呼ばれるのを通音といひ常には用ひられないが理論上有るべきものと認めたものを質音と名付けたのです。此全齋の意見は苦心の上からの創見であります。元來言語の學問は歸納的に論述すべきもので、創作すべきものには無いといふ見地からいふと、首肯され無いです。後年の學者に非難攻撃を受けるのが、此點に在るのです。斯る非難があるにしても、全齋が音圖に朝鮮の字音を用ひて我字音の證明に供したのも、亦一卓見であります。先に文雄は華音即唐音に依つて同様の證明をしたのであります。此の元や明の時代の華音を以てするよりも、後の全齋が朝鮮の字音を以て證明してゐる方が遙に勝れた遣方であるとおもふのであります。屢々革命や民族の移動侵入を重ねて、言語音韻の動搖變轉を逞うした支那後代の音よりも、比較的變革、動搖の少い朝鮮音の方が、寧ろ、唐代の音韻圖といはれる「韻鏡」には近接適切してゐるのではなからうかと考へられるのであります。全齋自身は「漢吳音圖」の創見として、六條を卷首に標榜してゐるが、此については一々改めて述べるに及ばぬとおもふので、省略に附しておきます。

全齋について、狩谷校齋が出でて我古典の考證に字音を用ひたり、又前に述べました東條義門が「於乎輕重義」や「男信」で、關政方が「傳字例」で支那字音を以て我古典に利用して、先人たる本居宣長の所説を補訂したのなどもありますが、これは他の方面の事蹟でありますから、只これ文をいつておきます。

文雄や全齋の「韻鏡」研究上の卓見や功績は今申しました如くであります。此人達に次いで、我「韻鏡」學上に見遁す事の出来ない者は、黒川春村であります。此人は文久二年「音韻考證」を著して其中に種々の卓説を述べてゐます。全部二十二卷とか三十卷とかあるといひますが、自分の見たのは只其二卷丈で、他に「聚用鈔」といふものと文ですが、

此三卷の中には、澤山の名論卓見があります。勿論、部分的研究のものが多くを占めてゐるのですが、中々立派なものです。一々茲に述べる譯にいかぬからこれを省略します。此春村の門人に白井寛蔭といふのがあります。此人も亦一方の雄將で、師匠の「音韻考證」を補成し、又別に「音韻假字用例」といふ書物を、萬延元年に出版してゐますが、これは本居宣長の「字音假字用格」の補訂完成であります。

これまでは江戸時代の話であります。明治維新後になつては、一時開國の氣運につれて泰西の學術の講究が專一となつたがため、暫時、此「韻鏡」學は荒れた有様であつて、只幕末からの學者が此過渡期に居て命脈を繋いでゐたのであります。前に述べました義門や春村と親交を結んで居た岡本保孝が、其一人であります。此人には「況齋叢書」といふものがあつて、二百二十六卷百五十有餘種の著述が所收されてゐます。短篇のものが多いのですが、「韻鏡考」、「磨光韻鏡考」、「漢吳音圖補正」、「音韻答問錄」、「古音攷」、「駁全齋讀例」などの諸篇がありますが、何れも寫本で刊行されてゐないので、帝國圖書館と靜嘉堂文庫とに善本が所藏されてゐます。此保孝の門人に木村正辭博士があるのです。博士は本領は國文學者で、「萬葉集」研究の第一人者であります。博士は又支那音韻學にも造詣が深かつたので、小學に關する著作も、大分あります。中に「音韻雜考」、「漢吳音圖正誤」等があり、「萬葉集」の三辨證と稱せられる「萬葉集文字辨證」、「萬葉集字音辨證」、「萬葉集訓義辨證」の著があつて、此中に種々支那音韻から「萬葉集」の考證をせられてゐます。誠に斯道の名著であります。又明治三十七八年頃「韻鏡」について金澤の碩學高橋富兄といふ人と論争を當時「帝國文學」誌上に連載して世人を驚かした事もありました。以上諸氏は何れも江戸時代からの學者であるといつてよい方です。眞に明治以後の「韻鏡」學者としては、滿田新造、大矢透、大島正健の三博士があります。滿

田博士は、「國學院雜誌」や「東洋學報」などの誌上に有益な論文を發表され、大正四年には「支那音韻斷」を刊行して其研究の要約を公にせられました。此書の内容は極めて豊富なもので、特に音韻の時を逐うて轉變した跡を明らかにされたのは、實に其卓見であります。大矢博士は、當代に於ける斯學の巨擘といふべき人で、「國學院雜誌」を初め、諸誌の上に論文を公にせられ、又「韻鏡考」、「同附錄隋唐音圖」など直接「韻鏡」に係した大著や、間接のものに「假名遣及假名字體沿革史料」、「假名源流考」、「周代古音考」、「同韻徵」等の名著があります。此人の名論卓説は世に周知の事實でもあり、耳目に新なる所でもありますから、茲に改めて申しあげるに及ばないから略しておきます。大島博士は、また一代の學者で、「國學院雜誌」、「帝國文學」などに諸説を發表せられ、「音韻漫錄」、「支那古韻考」、「韻鏡音韻考」、「翻切要略」、「改訂韻鏡」、「漢字聲符考」(後に漢字音韻考と改稱)、「韻鏡と唐韻廣韻」、「韻鏡新解」、「支那古韻史」、「漢音吳音の研究」等の諸著を世に出されました。殊に「支那古韻史」は、一大雄篇で不朽の著述と唱へられてゐるものです。本書については世人の記憶に新なるもので、今更詳述するを要しないのであります。尙三博士に次いで、岡井慎吾博士があつて、斯道に精通せられてゐるのです。自分も此等の諸先輩の驥尾に附して今尙研究をしてゐるのであります。

此迄述べましたのは我邦の研究であります。元來「韻鏡」といふ書物は、夙に支那では散逸して仕舞つてゐたので、彼邦では、從來其研究が無かつたのであります。獨、我日本にのみ成し遂げられてゐたのです。處が近年支那で小學音韻學の研究が勃興して來て、我永祿板や寛永板の「韻鏡」の影印本や覆刻本が刊行され、彼邦の學者の研究が漸く現はれて來たのです。殊に最近熾燿石室から唐代の「音圖」が發掘された相であります。此「音圖」がやがて我邦に傳來す

るでせうから、此傳來があつた曉には、「韻鏡」の本質が明かになり大に發明する所があるでせうと鶴首して待つてゐるのです。

以上申しました所で、「韻鏡」研究の大略がおわかりになつたとおもひます。「韻鏡」が支那で刊行の際、已に出版者の張麟之が序例を添附して、其序文の中に反切の用に供すべきものだといつたのが、抑々誤解の源で、後世の學者がこれに誤まされ、且、本邦に傳來して、其發見があつてから後には、又々人名撰定、名乗反切などの曲説を生じて、益々其誤解を重ねたが、河野通清や僧文雄や太田全齋に依て、順次、其誤解曲説が一掃されて、「韻鏡」の本義本質がわかつたのであります。「韻鏡」を研究するには、其序文は全部度外視して、只本圖の音圖丈を以て、古音の研究をなすべきであります。又決して古人先哲の註釋なども氣にかけてはならぬのであります。つまり音圖のみを標準として、他を全然顧みない様にする事であります。丁度今回此「韻鏡諸本展觀」に附隨して、特別展觀の「萬葉集」が出陳されてゐますが、此「萬葉集」の刊本も、初めは無訓本であつたが、後に附訓本が出て、又種々の註釋本が出来たのであります。それで後世の研究者には、大變便益を得る様になつたのです。然し、又一方よりいへば、有訓本や諸種の註釋書が出来たがために、却つて、後世、誤讀や誤解や曲説が起つて、果ては文字の改竄などを無暗矢鱈に行つたりして、愈々益々五里霧中に彷徨せしめる有様となつて仕舞つたのであります。「萬葉集」は、元來、漢字即所謂萬葉假名で記したものであるのだから、後に假名で附訓したのが、其誤讀や誤解を來したものととなり、其上に此等の誤讀や誤解のものに依て、後の學者が註釋を加へたから愈々益々迷路に陥つて仕舞つた譯であります。それで眞正の「萬葉集」研究には、附訓を取去り、註釋を顧みずして、全部漢字即所謂萬葉假名丈の本文に依て細心熟慮して、徐に研究を遂げ

なければ眞髓を悟得出来ないであります。近時此風潮傾向が専ら學徒の間に行渡つて認識された様であります。自分が青年時代に或英語の先生が、沙翁の戯曲を教へられた際に、沙翁の戯曲は、是迄澤山の研究者が種々の註釋を施したがために、却つて眞相がわからないのである。それで沙翁戯曲の本質本體は、此等の註釋を全く除去した其本文を讀んで、靜かに考慮すべきである。丁度寺院に安置してある諸々の本尊の佛像が、其燈火の煤煙で、くすぶつて黒くなつてゐるが、此煤煙を悉く拂ひ去つて、茲に初めて本來の金色燦爛たる本尊を拜する事が出来る如きものであります。此等の話と同じ様に、「韻鏡」の研究にもまた大に注意留心を要するのであります。これで自分の卑見の概要は述べ終つたのであります。尙注意すべき事項や、必要なものを言ひ落した所がありませうが、其等は本日皆様にお上げ申しました「展觀目錄」に大抵の典籍は載つてゐますし、又未だ不充分で至つて未熟であります。自分の撰述の「韻鏡研究年表」が出陳中に御座りますから、此二つを御參考に御覽下さいましたならば、大體おわかりになるとおもひます。誠に甚だつまらぬ長い話を致しまして御静聽を煩しました。これで御免を蒙ります。(拍手)

(本篇は去十月二十八日、本學圖書館主催の「韻鏡語本展觀會」に於ける龜田教授の御講演を要領筆記したものである。編輯子記)